

柵越しに 麦食む小馬のはつはつに

相見し子らし あやに愛しも

作者未詳(巻十四・三五三七)

新型コロナウイルスによってお亡くなりになった方や闘病中の方、様々な影響を受けざるを得なかった方、皆様にお悔やみとお見舞いを申し上げます。

2020年5月20日は、二十四節気の「小満」にあたります。「小満」とは、草木が茂って周囲に満ちてくることを意味しており、なにごとくこれから少しずつ満ち足りてゆく、とくらえてあやかりたい思いです。

この歌では、柵の向こうからはみ出して実る麦の穂を「仔馬が」はつはつ(ほんのわずかに)に食べる様子を想像させて、そのようにほんの少しの間だけ会えた人が愛しい、と表現しています。

この歌を作った時に実際に目の前に仔馬がいて麦が生えていたわけではなく、ものた

やまと  
万葉がたり

とえだつたでしようが、豊かに実った麦とかわいらしい仔馬のイメージを想起させることで、少しの間だけ会えたという相手への初夏のようなさわやかな愛情が伝わってくるように思います。

筆者の故郷である宮崎県にも日本在来馬の一種がいて見学したことがあります。サラブ

レッドに比べて小型でずんぐりとしていて、どこことなく愛嬌がありました。いずれの在来馬も絶滅が危惧されていますが、古代日本では農耕や軍事に活躍していたようで、奈良県内でも当時の馬具などが出土しています。

【訳】柵ごしに麦を食べる仔馬のように、やつとほんの少し会えた人が、ふしぎに愛しいよ。

（県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか）  
次回6月3日